

(2) 母牛の外陰部・周辺部を洗浄

母牛・子牛・介助者に危険がない場所で保定後、水道水・消毒薬を用いてふん便の付着がないようブラシ洗浄を行います。特に尻尾の洗浄を忘れないようにしましょう(図4)。

汚れた消毒薬は、速やかに交換しましょう。

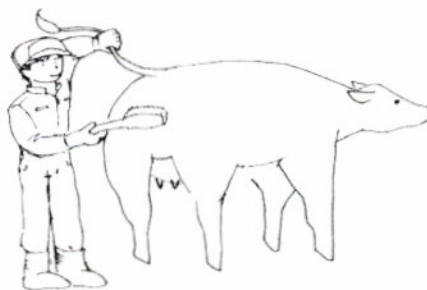


図4 介助の前には必ず洗浄

(3) 胎位の確認

直検用手袋を用いて母体と羊膜を傷つけないよう慎重に頭の位置と脚の確認をします(図5)。

整復が難しい不正胎位や過大児、死産が疑われる場合など難易度が高い異常産では、無理な介助は行わず速やかに獣医師に連絡しましょう。

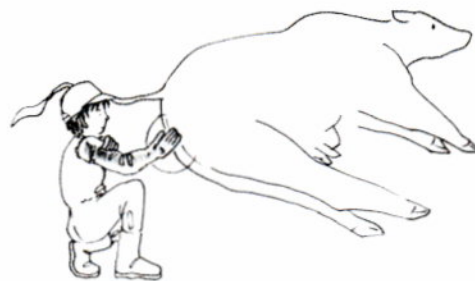


図5 手袋が汚れたら即交換

(4) どうしてもけん引しなくてはいけないとき

洗浄・消毒を行ったけん引ロープやチェーンを正しく用いて陣痛に合わせてゆっくりとけん引します(図6)。あくまで陣痛による子宮収縮をサポートするという意識で、無理強いは禁物です。

産道粘滑剤を十分に用意し産道と子牛が乾燥しないよう留意します。



図6 無理やり引っ張らない

(5) けん引するときの注意点

母牛が寝ている場合は、1回立たせ、産道内の手前に広く自由なスペースをつくります。こうすることで胎子の体位が整えられます。

両足同時に引っ張らず、決まった片脚が必ず先に出るよう、子牛の体を斜めにして狭い産道をすり抜けるイメージでけん引します(図7)。子牛の体を斜めにするにより、母牛の骨盤に引っかからないようにします。

がむしゃらに引くだけではなく、時には子牛を一旦押し戻す事も効果的です。

子牛の肩まではまっすぐ後方に引き、胸が出たら飛節の方向に向きを変えて引きます。



図7 片脚ずつ牽引する

4 分娩介助の注意点

(1) 羊膜は畜主が破ってはいけない

産道は、胎膜が外陰部から出入りを繰り返すことにより次第に広がり、分娩準備が整った時点で自然に破れます。人間が無理やり破いてしまうと、産道が十分に開き切らずに引っ張り出すこととなります。出血が見られたり胎盤の一部が見られるような明らかな異常のとき以外は破らないようにしましょう。

(2) 初産牛は時間がかかる

初産牛は産道の拡張に、より時間がかかります。初産牛は明らかな異常でない限り、助産を急いではいけません。

(3) 力ずくのけん引は行わない

不正胎位を整復せずに無理やりけん引した場合、産道を傷つけたり子牛が骨折するなど母子共に深刻なダメージを与えてしまいます。難易度の高い不正胎位の時は、無理な介助は避け、獣医師に連絡しましょう。

(4) 無謀な介助は絶対に行わない

自分の手に余るような難産時に、産道をいじくり回してはいけません。そのような無謀な分娩介助では、子牛の生存確率は著しく低くなり、その後の母牛の繁殖にも悪影響を残します。介助のイメージがつかめないままで、中途半端な介助は行わないようにしましょう。

5 分娩直後に必要な作業

(1) 子牛の安全の確保

母牛は分娩直後に、子牛の体をなめます(リッキング)。

母牛が上手にリッキングしている場合は、リッキングが終わるまで待機します。気が立っていて、落ち着き無く動き回る場合は、踏みつけ防止のため、子牛を分娩場所から速やかに清潔な場所に隔離しましょう。

(2) 子牛の体温管理・臍帯消毒

生まれたての子牛は羊水で体が濡れているため、冬期には分娩に気づかないまま放置したために凍死するケースがよく見られます。分娩後にリッキングさせず、母牛から速やかに隔離した場合には、羊水をしっかりと拭き取りましょう。

臍帯消毒は、ヨード剤を小さな容器に取り分け、ディッピングの要領で消毒します。臍帯内部に直接薬剤を注入しないようにしましょう。

(3) もう一頭いないか再確認

分娩前から腹囲が大きかったり、早産・死産の場合、また小さい子牛が生まれたときは双子の可能性が考えられます。双子が疑われるときは、第2子が生まれるまで1時間程度経過を観察します。もし、途中で異常に気付いた場合は、獣医師に連絡するか、適切な方法で第2子の有無を確認します。